

居住者のライフスタイルとエコ意識・行動の関係

ー神奈川県秦野市を対象としてー

合掌 顕¹⁾

¹⁾岐阜大学地域科学部

A study on the relationship between lifestyle of residents and eco-consciousness, eco-behavior.

Akira Gassho¹⁾

¹⁾Gifu University

Abstract: To discuss the relationship between lifestyle of residents and eco-consciousness, eco-behavior, we conducted questionnaire survey in Hadano city, Kanagawa Prefecture. Questionnaire sheet was delivered to residents of four area of Hadano city through their residents association. The result of cluster analysis showed that residents were classified into four clusters by their lifestyle. The results of one-way ANOVA on the knowledge of global environment problems showed that the knowledge of the global warming and the chaotic deforestation were significantly differed among clusters. Another one-way ANOVA on the practice of eco-behavior showed that there were significant differences among clusters, especially on the behavior which need to take some more time or labor to practice.

Key words: Lifestyle, Eco-consciousness, Eco-behavior, Sprinkling water, Enjoying evening cool

要旨: ライフスタイルとエコ意識、エコ行動の関係について検討するために、神奈川県秦野市の 4 地域を対象としてアンケート調査を実施した。アンケートは自治会を通じて計 856 部を配布し、198 部を回収した。得られたデータについてクラスター分析を行った結果、調査対象者はライフスタイルによって 4 つのクラスターに分類された。これらのクラスターとエコ意識、行動の関係について検討したところ、「地球温暖化」や「無秩序な森林伐採」といった項目の認知度や、「電気器具のコンセントを抜いておく」、「省エネタイプの電気機器やエコマークの付いた商品を選ぶ」といった比較的実行に手間や負担が伴う項目でクラスター間に有意な差が見られた。エアコン、扇風機の使用頻度、使用時間帯ではクラスターによる差は見られなかった。また、打ち水の実施率や実施時間帯、夕涼みを行う理由や行う場所の一部にクラスターによる有意な差が見られた。

キーワード: ライフスタイル、エコ意識、エコ行動、打ち水、夕涼み

1. はじめに

近年、電力消費を抑え自然エネルギーを利用するライフスタイルを志向する機運が高まっており、その傾向は 2011 年の東日本大震災を契機により強くなった。このようなエコ行動を志向するライフスタイルについては、特に震災直後のような状況では、人々が節電を行いこれまでに比べ不便な生活を送ったにもかかわらず、快適性は損なわれていなかったことが角川、久野(2012)により報告されているが、一般には従来の生活習慣を変更してエコ行動を実践することは、意識としてはその必要性を感じていても、負担の増加や快適性の低下を招くことから難しいと考えられる。本研究ではこのようなエコ行動の生起が住民のライフスタイル

と関連していると考え、ライフスタイルとエコ意識、エコ行動の関係について検討することを目的としてアンケート調査を行った。

本研究で調査対象とした神奈川県秦野市は神奈川県の西部に位置しており、自然が豊富で特に「秦野湧水群」に代表される湧水の豊富な地域として知られている。一方で秦野市は東京、横浜への通勤圏でもあり、また大学が立地している地域もあることから、さまざまなライフスタイルの居住者がいると考えられ、本研究の調査対象として適していると考えられた。

2. 方法

2.1 調査対象

調査は2013年6月～7月にかけて行われた。調査用紙は各自治会の自治会長に依頼し、自治会に入っている全戸に配布してもらった。調査用紙の回収は同梱の封筒により各回答者より郵送してもらうこととした。調査用紙は全自治会で856部配布し、198部を回収した（回収率23.1%）。

調査項目は以下の6項目であった。

1. ライフスタイルについて:「生活のどの様な面を重視するか」という点からライフスタイルを測るために、須田ら(1992)を参考に30項目の質問(あてはまる・あてはまらないの2値)を設定した。

2. エコ意識・行動について：地球環境問題に対する認知度を測るための5項目と、エコ行動の実践の程度を測るための21項目の質問を設定した（それぞれ4段階）。エコ行動に関する質問項目は大阪ガス（株）エネルギー・文化研究所が行った「これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査」を参考にした。

3. 冷暖房機器の使用について：宮田ら（2012）を参考に、冷暖房機器の所有台数、使用頻度、使用時間帯を質問した。

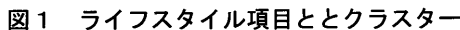
4. 防署の工夫について：宮田ら（2012）を参考に、窓開け、打ち水、夕涼みの各行為について行うかどうか、行う場合にはその頻度と時間帯、打ち水・夕涼み

5. 秦野市のイメージと自然環境について：秦野市のイメージや市の自然環境、湧水のイメージについて、また近年問題となっている里山の管理放棄や鳥獣被害について質問した。

6. 住居と家族について：住居の構造や築年数、居住年数、家族構成等について聞いた。

アンケート調査の回答者の属性は男性 91 名、女性 94 名（不明 11 名）であった。また年齢では 60 歳代が全体の 28%、70 歳代が 25%を占めていた。職業は「無職」が全体の 34%と最も多く、「主婦」が 19%、「会社員・公務員」が 13%であった。

回答者のライフスタイルを分類するために、30 項目の質問に対する回答についてクラスター分析 (ward 法) を行った。分析の結果、回答者を 4 つのクラスターに分類することが妥当と考えられた。これらの 4 つのクラスターとライフスタイル項目との関係について検討するために、クラスターごとに各項目の平均回答率を算出した (図 1)。図 1 より、クラスター 1 は多くの項目で「あてはまる」という回答が少なく、特定のライフスタイルの傾向は見られなかった。回答者属性との関係では相対的に 40 歳代が多く、職業は会社員、アルバイト・パートが多かった。また、比較的居住年数が短いという傾向が見られた。クラスター 2 はクラスター 1 とは逆に多くの項目で「あてはまる」としており、このことから「多趣味・積極型」と考えられた。相対的に 90 歳代が多い傾向が見られた。クラスター 3 は特に「老後の生活」や「地域・近所の付き合い」を重視す



る傾向が見られたことから、「老後重視・地域密着型」と考えられた。相対的に 80 歳代が多く、「無職」との回答が多かった。クラスター4は特に「食の楽しみやこだわり」を重視する傾向があり、「食生活重視型」と考えられた。

3.3 ライフスタイルとエコ意識・行動の関係

ライフスタイルとエコ意識・行動の関係について検討するために、地球環境問題に関する 5 項目とエコ行動の実践についての 21 項目について、クラスターを要因とした 1 元配置分散分析、および多重比較を行った。その結果自然環境問題については「無秩序な森林伐採」でクラスター3 は 1 に比べて有意によく知っており、「地球温暖化」ではよく知っている傾向が見られた(図 2)。エコ行動については、質問項目 1、3、5、6、7、11、18、19 でクラスター間に有意な差があり、項目 12 で有意傾向が見られた(図 3)。これらの項目は例えば「電気器具のコンセントを抜いておく」や「省エネタイプの電気機器やエコマークの付いた商品を選ぶ」など、比較的実行に手間や負担が伴う行為であり、「こまめに照明やテレビのスイッチを切る」や「エコバッグを持参する」、「ゴミの分別」などがどのクラスターでも実践されているのに対して、これらの多くの項目ではクラスター1 と他のクラスターの間で有意な差や傾向が見られた。この結果はライフスタイルの違いが地球環境問題に対する関心やエコ行動の実践に影響を与えていることを示していると考えられる。

3.4 ライフスタイルとエアコン・扇風機の使用

エアコンの平均所有台数は 2.5 台であり、クラスターを要因とした 1 元配置分散分析の結果、クラスター1 (平均 2.3 台) に比較してクラスター4 (平均 3.2 台)

が所有台数が多い傾向が見られたが、使用頻度ではクラスター間に有意な差は見られなかった。一方、扇風機の平均所有台数は 2.2 台であり、所有台数、使用頻度ともに、クラスターによる有意な差は見られなかった。使用時間帯については、エアコンは午後、夜、就寝時の使用率が高く、扇風機も同様の時間帯に多く利用されているが、エアコンに比べてどの時間帯も利用されており、朝、午前、夕方ではエアコンより使用率が高い。このことから、午後の暑い時間帯や家族の集まることが多い夜、就寝時にはエアコンが優先して使用され、一方朝や夕方などで少し涼感を得たいときには扇風機が利用される、という機器の使い方が見てとれる。なお、使用時間帯についてはクラスター間で有意な差は見られなかった。

3.5 ライフスタイルと防署の工夫

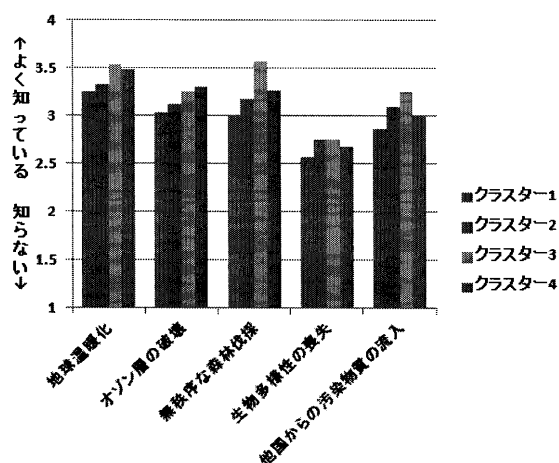


図2 地球環境問題の認知度とクラスター

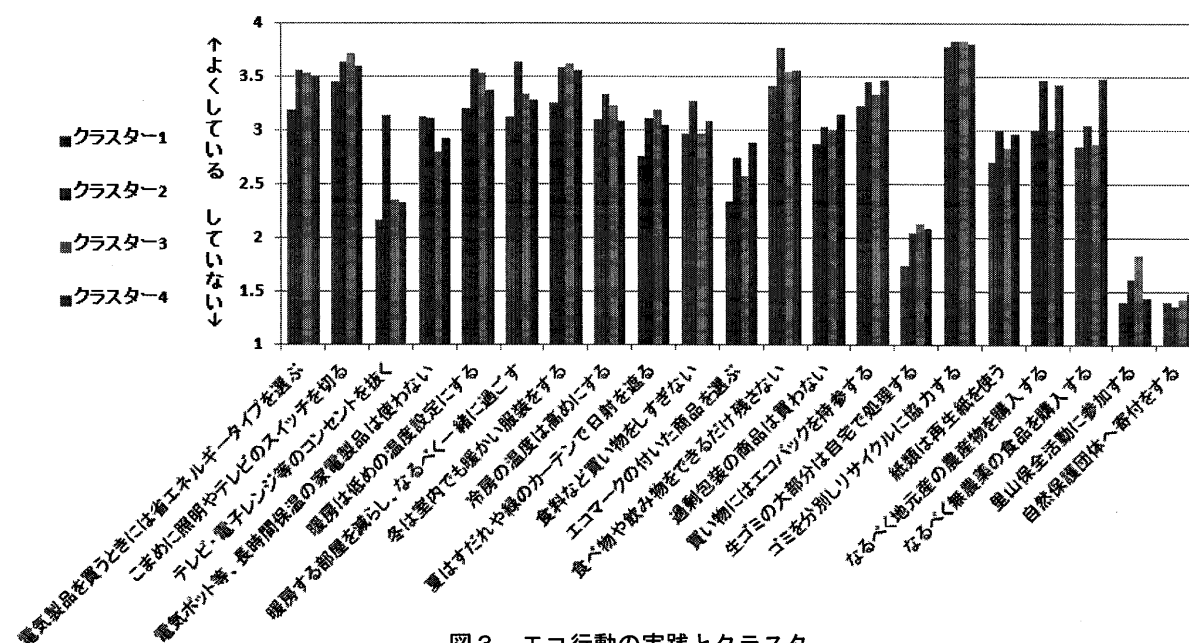


図3 エコ行動の実践とクラスター

窓開けは全体の 99%が行っており、クラスターによる有意な差は見られなかった(図 4)。頻度は「毎日」が最も多く、全体の 73.8%を占めていた。窓を開ける時間帯は朝は全体の 54.4%が実施しており、特にクラスター 4 は有意に高い傾向(70.4%)が見られた。午前中は全体の 70.3%が、午後、夕方は 56.4%、夜 41.0%が実施している。就寝時は 25.6%と少ない。

打ち水は全体の 52.7%が実施しているが、クラスター 1 はより少ない傾向が見られた(図 4)。頻度は「毎日」が全体の 32%と最も多かったが、「週に 2~3 回」も合わせて 43.3%あった。時間帯では朝は全体の 31.0%が実施、午前中は有意にクラスター 4 で多く(41.2%)、1 で少なかった(9.8%)。午後は全体の 13.3%、夕方は全体の 64%が実施している。打ち水を行う理由で最も多かったのは「庭木に水をやるついで(85.4%)」であり、ついで「温度を下げて涼しくするため(47.6%)」、「涼感を得るため(30.1%)」であった。打ち水には水道水を利用しているケースが全体の 77.5%と最も多く、湧水の利用は 12.7%、風呂の残り湯は 13.7%、雨水は 17.6%であった(図 10)。打ち水を行う場所は「庭やテラス」が 84.0%と最も多く、ついで「玄関周り」が 53.0%、「道路や路地」が 20.0%であった。

夕涼みについては全体の 24.9%が実施しており、「週に 2 回」との回答が全体の 38.6%と最も多かった(図 4)。時間帯では「夕方」が最も多く(65.8%)、次いで「夜(45.5%)」であった。夕涼みを行う理由は「涼しさを感じたいから」が最も多く(69.6%)、次いで「自然を感じたいから(21.7%)」、「運動をかねて(19.6%)」であった。特に「運動をかねて」についてはクラスター 2 で多い傾向が見られた。夕涼みを行う場所については「自宅の庭や縁側」が全体の 59.6%と最も多かったが、クラスター 2 では有意に少ない傾向が見られた。次いで「自宅の前」が 36.2%となっており、「近所の路上(10.6%)」、「近所の公園、空き地、寺社等(6.4%)」は少ない。「湧水の近く」は 0%であった。

以上より、防署の工夫においても比較的実行のための手間が少ない「窓開け」ではライフスタイルによる差は見られなかったのに対し、「打ち水」や「夕涼み」では差が見られたことから、これらの行動の実施のしやすさはライフスタイルによって異なると考えられる。

4. まとめ

神奈川県秦野市の 4 地区を対象にライフスタイルとエコ意識、行動についてのアンケート調査を行い、以下の知見を得た。

・地球環境問題については概ね意識が高いが「地球温暖化」や「森林伐採」でライフスタイルによる差が見られた。

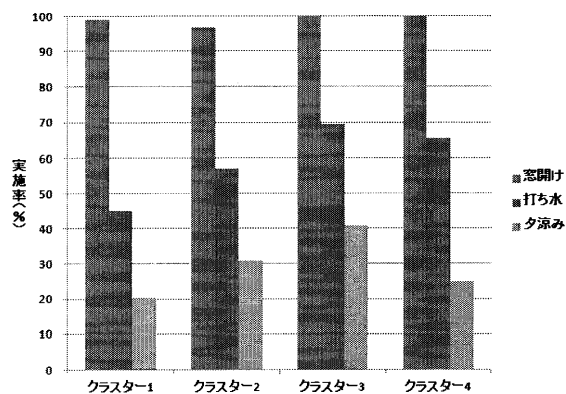


図 4 防署の工夫の実施率とクラスター

- ・エコ行動では、省エネルギーやゴミの分別等は全体的に実践されているが、比較的実行に手間や負担が伴う行為ではライフスタイルによる差が見られた。
- ・エアコン・扇風機の使用についてはライフスタイルによる差は見られなかった。
- ・防署の工夫においても、比較的実行に手間がかかる行為ではライフスタイルにより差が見られた。

謝辞 本研究は平成 23~25 年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究 A(代表:佐土原聡 課題番号 23246100)の研究の一環として行われた。また、本アンケート調査にご回答いただきました秦野市の皆様、調査用紙の配布にご協力を頂きました各自治会長様、秦野市くらし安心部市民自治振興課の皆様に感謝いたします。

6. 文献

- 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所: これからの住まいとライフスタイルに関する生活意識調査、CEL 97、pp 56-59、2011
- 角川篤史、久野覚: 東日本大震災に伴う節電の影響によるライフスタイルの変化に関する調査研究 一夏期についてのアンケートの集計結果一、日本建築学会東海支部研究報告集 (50)、pp 389-392、2012
- 宮田希ら: 夏の涼のとり方に影響する要因の考察: 西日本 4 地域における実態調査より、日本生気象学会雑誌 49(1)、pp 23-30、2012
- 須田博司ら: ライフスタイル別の生活準備 第 I 報: ライフスタイルと生活意識、東海女子短期大学紀要 18、pp 53-64、1992

<連絡先>

合掌 顕
岐阜市柳戸 1-1
岐阜大学地域科学部
gash@gifu-u.ac.jp